

長編部門『園田という種目』 太田真博監督・松下倅子 インタビュー

取材・文＝水上賢治

いかに役者の力を引き出して、 その登場人物を魅力的にするかに力を注いでいます。(太田)

――まず、前段としてイメージフォーラム・フェスティバル 2015 などで上映されている短編『園田を元気づけてやろう的な』があると思うのですが、この作品の長編化という受け止め方でいいのでしょうか？

太田 確かに長編化であることは間違いないのですが、裏を明かすと凶らずもそういう順番になってしまったというか(笑)。そもそも長編映画として脚本も用意して、撮影も終了していたんです。ところが、いざ編集作業に入った段階で迷子になったというか、完全に頓挫してしまって(苦笑)。そこで、とりあえず自分の中で見えていたヴィジョンでつないでみようとなり、まとめたものが結果的に、短編『園田を元気づけてやろう的な』になったんです。

――では、もともと構想としてはまず長編があったと。

太田 そうなんです。それで『園田を元気づけてやろう的な』が出来てひと段落したころ、この短編を基本線に改めて構成を練り直し、編集を考えて。熟考の末、ようやく出来たのが今回の『園田という種目』になります。ですから、長編として始めた映画が短編を経て、ようやく長編となったという、かなり回り道をして完成に至りました。

――長編化にあたり、短編『園田を元気づけてやろう的な』はどんな使われ方？

太田 『園田という種目』は3部構成になっていますけど、オープニングのショッ

トのあとのパートは、まるまる『園田を元気づけてやろう的な』を使っています。

――作品は、ちょっとした罪を犯してしまった園田という人物の肖像を、彼の周囲にいる人々を通して克明に浮かび上がらせていきます。このアイデアの元はどこから？

太田 これは隠すのは自分としても嫌なので正直に話しますと小説でいったら私小説とでもいいましょうか。セルフ・ドキュメントではないですけど、私的映画です。実体験がもとになっています。園田＝私自身。法を犯して、罪を認め、また社会に復帰したとき、いろいろな人ときちんと向き合うことで自分自身を見つめ直したというか。何か他者と向き合うことで自己を改めて確立しようとしていました。結果、他者ばかりを描くことで、園田＝私を描くという形のストーリーになりました。ただ、僕自身は園田ほど辛く酷い目には遭っていないんですけどね。

――話題の中心人物が登場せず、周囲の人物によって語られる方式はどうしても『桐島、部活やめるってよ』と重なります。

太田 200%、意識していました(笑)。ただ、それぐらい意識したから、似て非なるものになったと僕は思っています。120%ぐらいの意識だったら、もっと似てしまったかもしれない。直接的な影響を受けたのは映画ではなく、小説の方です。言葉ではなかなかうまく説明できないんですけど、読んでいて自分が疾走しているような気分になるというか。その先が知りたくて一気に読んでしまうという

のとも違うんですけど、とにかく疾走しているような感覚になる。本を読んでこういう感覚を抱くことってまずない。こういう感覚になるような作品を作りたい思いがありました。でも、始まりはそうだったんですけど、映画を作り始めたら、そのことはどうでもよくなっていて(笑)。最終的にはさきほど少し触れましたけど、脚本を書きながら、撮影しながら、編集をしながら、徐々に自分らしきみたいなものを取り戻していったというか。自己を再生していった。振り返ると、すべてが“ダサイなあ”と。作品を見ると、丸裸の自分を見ているような気がして。なんか遠くない日に書いた日記を読んでいるようですごく恥ずかしい気持ちになります(笑)。



――ここからは主演を務めた松下倅子さんにも入っていただいて、お話をうかがいたいのですが、お二人は演劇映画ユニット「松田真子」を組まれているときいています。

松下 私がある劇団にいて、その舞台撮影を太田がしていて。そこで出会ったのがきっかけですね。

太田 ユニットを組んだのは2013年ぐらいなので3年ぐらいになります。

――なぜ、ユニットを組んでみようかと？

松下 太田がワークショップを開催して、声をかけられたんですよ。“よかったですらきてください”と。ただ、作品がつまらなかつたら嫌じゃないですか。それで、手がけた作品のDVDを見せてもらったらこれがおもしろい。それで全面的に信頼したというか。私、自分から言うことではないのですが、芝居が下手で。太田以外の作家さんからももらった脚本で、最初の稽古とかもう目も当てられないぐらいどうにもならなかつたりする(苦笑)。でも、太田の脚本はすごくやりやすい。ずっと言葉や状況が入ってくるんです。

——確かにこの作品はジャンルで分けるとしたら会話劇と称されると思います。しかも受け手の心をきちんとつかむ言葉でセリフが構成されている。言葉の選択がすばらしい。

松下 役者としては人と人がきちんと言葉を交わしているというか。それぞれの呼吸が繋がって無理なく成立している感覚があるんです。たとえば読んだときはよくわからないんだけど、実際にその場にたって相手と向き合って交わしてみるとなるほどと納得できるセリフだったりする。そういうことがたびたびありますね。

——太田さん自身は脚本作りで考えていることは？

太田 僕自身はあまり言葉に執着しているつもりはないんですよ。舞台でも、映画でも、考えていることはひとつ。役者を最大限に生かすこと。極端なことを言うと、役者以外のたとえば舞台となる部屋であったり、入ってくる風景だったりといったところには興味がない。役者を撮りたい。いかに役者の力を引き出して、その登場人物が魅力的になるようにするかに力を注いでいます。

——ただ、今回の松下さんが演じた役に関しては、セリフが少ない。あまり語らないことで自身の園田に対するスタンスや自らの意志を伝える役で。何気なく歩くシーンに意味を持たせたりしていて難しかったのではないのでしょうか？

松下 正直、思いました。“私だけセリフ少ない”って(笑)。ただ、こういうタイプの役は初めてだったので新鮮でした。歩くシーンに関しては、太田に怒られました。私がいまその状況を把握しないまま演じて、自分でもちょっと準備不足

だったなと思ったら、やっぱり見透かされて。すごく怒られました。だから、太田の演出は信頼しています。

太田 役者の演技には妥協しないというか。まず、監督として自分が違うと思ったら、それに嘘をついてOK出してはいけないと思うんです。そこは手を抜けない。逆をいうと、そういう演出家の違和感に気づける役者とやりたい。自分のスタイルに凝り固まっていたり、自分の意見に固執してしまう役者はダメかもしれない。松下をはじめ、今回出演してくれたメンバーはそういう細かい指摘にきちんと対応してくる。それにはすごく感謝しています。

——お二人はタッグを組んで舞台も映画も作られています。何か違いはありますか？

太田 ないですね。そもそも、松下がいろいろな演出家と組むという舞台をやっていたんですけど、僕と組むとなったときのリクエストが“映画のように舞台をやりたい”だったんですよ。

松下 太田の映画を知ってますから、へんに舞台っぽいでこで収まってほしくなかったんですよ。

——では、あまりお二人の中で舞台と映画の境界線はないと。今、日本の映画界では映画監督が舞台演出に進出した、もともと劇作家をしていた人が映画を監督したりしていますけど、太田さんのスタンスはまたそこも違う新しい形かもしれません。

太田 舞台役者がキャリアのスタートですから、演劇に対する愛はいまもありますね。どこか自分を演劇人と思っているところもあります。そもそも監督を目指したのも挫折から。最初は役者を目指していたんですけど、ある演技のワークショップにいったら、ワンシーンだけ書く機会があって書いてみたんです。そうしたら講師から、こっちの方が向いているのではと言われた。念のために監督コースに通ってみたら、また同じことを言われまして。監督としてどうのこうのというより役者としてはダメと烙印を押された気がして、そこから作り手に路線を変更したんですよ。

——今回は国際コンペティションへの出品になります。どう受け止めていますか？

太田 決まったとご連絡をいただいたと

きは冷静な振る舞いに終始していたんですけど、内心はうれしくて軽く飛び跳ねるぐらいでした(笑)。ほかのノミネート作品も観たいですし、自分の今後の映画制作につながるよう実りのある時間になりたいと思っています。

松下 私は埼玉県民なので、地元の映画祭で上映できて、地元の方に観ていただける機会ができたことがとてもうれしいです。ひとりでも多くの方に観ていただいて、いろいろな感想を聞けたらと思っています。



<上映スケジュール>
7月18日(月・祝) 10:30~
SKIPシティ映像ホール
7月21日(木) 14:30~
SKIPシティ多目的ホール

『園田という種目』

真剣でちょっぴり可笑しい人たちの会話劇。そこから見えてくるものは？

園田が釈放された。大学時代の仲間たちは「園田を元気づけてやろう的な」会を開き、コールセンターの同僚たちは何も知らずに園田フィーバーに沸き立つ。仲間、同僚たちの、園田への思いは果たして…。

監督：太田真博
出演：松下倅子、社城貴司、白石直也、安部康二郎、野々山椿、溝口明日美、ヒザイミズキ、辰寿広美
<2015年/日本/93分>
©松田真子・ガノンフィルムズ

監督：太田真博



1980年東京都出身。舞台役者を経て2006年映画制作開始。主な作品は、福井映画祭2008でグランプリを受賞した『笑え』(08)、イメージフォーラム・フェスティバル2010で入選した『LADY GO』(09)。松下倅子と、演劇映画ユニット・松田真子を共同主宰。